

論 題 漁村集落の生活行為とコミュニケーション空間の利用  
—宮城県女川町竹浦集落を事例として—

学籍番号 20919033

氏名 羽島 愛奈

指導者 薬袋奈美子 准教授

1. はじめに

2011年3月11日に発生した東日本大震災。東北地方の太平洋沿岸部は大津波の襲来により壊滅的な被害を受けた。宮城県女川町には離半島部に小さな漁村集落が点在し、各々がまとまりのある海の暮らしを営んできた。

小規模な漁村集落の生活実態を空間利用から分析した研究は少ない。本研究では東北地方の太平洋沿岸部の中から女川町竹浦集落を対象とし、東日本大震災以前の集落における空間利用と生活行為の関係を、現地調査と文献から明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

地図から女川町竹浦集落の被災前と被災後の状況と地形を把握した。集落での生活の様子を詳細に知るため、2012年7/2、8/7-8/8、10/15-10/19、11/18-11/21に現地の住民の方計26名にヒアリング調査を行い、集落57世帯のうち14世帯の住宅の情報や集落空間の情報を収集した。また、女川町誌や郷土資料を用いて文献調査と分析を行った。

3. 竹浦集落

3.1 竹浦集落概要

竹浦集落は宮城県牡鹿郡女川町の中心から東に約4kmのところ位置する人口145人57世帯の漁村集落である。住民の3割が漁業を生業とし、ギンザケやカキ、ホヤ、ホタテの養殖が盛んである。東日本大震災の大津波で集落の大部分が流出し、壊滅的な被害を受けた。現在は復興に向けて高台移転の話合いが意欲的に進められている。集落は大きく3つに分かれており、大きい浜、小さい浜、だいわんと呼ばれている。

竹浦は漁業世帯数に比べて漁場が広い。漁場内には集落の漁業者や個人のみが知る地名が存在し、その情報は収穫量を左右するため決して他人に口外することはない。各漁業者は蓄積した経験を生かしながら海に出ている。

3.2 屋号から読み解く集落の歴史

表1には屋号と由来を分析したものをまとめた。旧家には日照の程度や、地形、昔の家長の名前等が由来となった屋号がつけられており、分家等比較的歴史の浅いものは船の商号を使っていることが分かる。最も古い家は大きい浜の庄屋と小さい浜の御前の家であり、これらの家から集落が形成されたと考えられる。これら2つは代々神主を務める家であり、

集落の中で重要な役割を担っていた。分家や新しい家が増えたため、だいわんを切り開いて集落を拡張した。

3.3 公共空間と外部空間

寄合いには支部会館や集会所が使われた。公的な集まりだけでなく、獅子振りの練習や高齢者の散歩の待ち合わせ場所としても利用され、人々の集まる場となっていた。

海岸近くのちびっ子広場は子どもたちだけでなく、母親たちや漁師、高齢者が集まり、世代を超えた豊かな交流が生まれる場であった。海岸付近は徐々に埋め立てられて道路も整備され、散歩や釣り、遊び場、立ち話等何気なく住民が訪れる場所であった。

集落には3つの商店があった。カキむきの忙しい季節などは集落外に買い物に出る時間もないため作業の合間をぬって軽食等を買求める人が多く、よく賑わった。

4. 住居周辺の利用実態

4.1 住宅

住居形態は東北の民家に多く見られるものであるが、空間利用に漁村の特徴がある。図1に住居と周辺環境の利用状況を示した。ほぼ全ての住宅に海を向いた縁側があり、釣りの手入れや作成、干物干し等を行う作業場となっていた。縁側は開放的な空間で道路に面するものが多い。周囲から作業の様子が見え、路地から声をかけたり挨拶をしたりとコミュニケーションをとるきっかけとなる空間であった。オカミの大きな神棚には氏神や海の神々が祀られた。外の流しや井戸は魚の処理に利用された。玄関前の階段に座って海を見ながら話をしたり、道行く住民に声をかけてお茶っこに誘ったりと住まいの内と外とのつながりが強いことが分かる。

4.2 納屋

納屋は住宅付近に別棟で設けられており、漁業に関連する作業を行う空間である。納屋における作業内容と収納するものを表2に示す。様々な行為が行われることが分かる。住宅と納屋は頻繁に行き来する為、住宅近くに位置する。養殖のしかけづくり等大きな作業は海岸や番屋で行い、個別の作業や収納空間として納屋を使用する。また、海岸の近くにまとまっている養殖漁業者の納屋は漁師たちの交流の場となっていた。

表1: 屋号とその由来

	屋号あり					屋号なし (商号)
	旧家	分家	日照	地形	その他	
大きい浜	御前の家	神の家 西の家 東の家 新家	カバフト サガレン 満州、	坂の家 田中 畑中 ハマネ ウエニ イカワム ゲ	キダハン タナコ インチョ ネ キジッ シヨヤ	マルトヨ マルフク マルタ ヤマボシ イチ マルキュウ
小さい浜	庄屋、 井戸端、 トンシヨ	新家		下手 山根 ムゲネ ヤマコ	新家、 天理教、 母屋、 新船 イモヤ チョッコ ラヤ、酒屋	マルコウ
だいわん		シンヤ		オシヤ ガタ、 タツブ チ		マルフジ マルム、 マルユウ カネカ

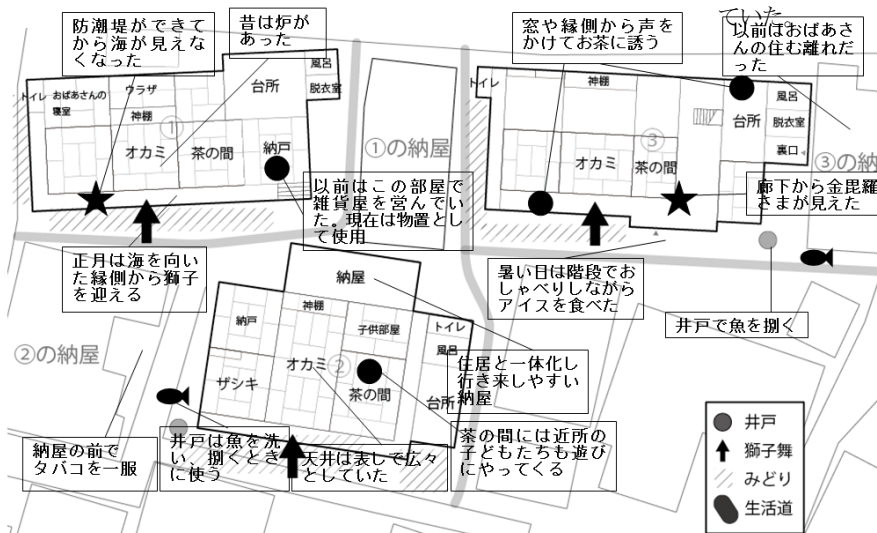


図1: 生活行為と住宅

### 5. 行為別の利用実態

集落全体における住民の生活行為と場所を図2にまとめて示す。

#### 5.1 漁業

ヒアリング調査を行った世帯の漁業種は、養殖、沿岸、遠洋、その他(釣り船等)の順に多い。いくつか兼ねて漁業を行っている世帯も見られた。組み合わせによって生活スタイルが異なることが分かる。沿岸での漁は朝早くから3~4時間程度で終了し、午後は海岸や納屋で養殖や釣り具づくりの作業を行うことが多い。

#### 5.2 海を見る

竹浦は土地の傾斜が大きいので、海岸から離れた住宅でも海が見えた。海辺にいるとき以外にも頻りに海を見ていたと話す住民が多い。自宅内や自宅近くの道路や庭から常に海を気にしている様子が見える。仮設住宅に移り、海が近くに見えないために安心できないという声もあった。

#### 5.3 魚を捌く

自宅近くの水場で捌いているという回答が多い。納屋の水道や外の流し、井戸等である。ホヤは海岸、ウニは自宅等種類によって場所が異なるが、庭や納屋の水場は日常生活に不可欠である。

#### 5.4 行事

厳しい海の暮らしの中で、神々が非常に大切にされ、以前は年末年始に24もの行事があった。特に1月の2,3日に行われる春祈祷の獅子舞は集落の最大行事である。

### 5.5 子どもの生活

子どもの遊びと場所について表4にまとめて示す。海釣りや貝とり等、子どもたちの遊びにも海が近い。山の奥のひみつ基地遊び、小さい浜全体を使ってのケイドロ、傾斜の大きい道路でのそりすべり等、子どもたちは小さな集落の空間を目一杯使って遊んでいたことが分かる。集落の子どもたちは互いに面倒を見合い、年齢に関係なく集まって遊んでいた。

### 6. まとめ

#### 6.1 結論

以上から竹浦集落の空間利用と生活実態が明らかになった。海と山に囲まれた僅かな平地に過密に住居を構えているながらも、人々は自然と空間を上手く利用している。厳しい自然とともに暮らす為に人々の交流の頻度は高く、世代を超えた豊かなつながりがあることが分かった。

#### 6.2 漁村集落の良さを継承するために

現在多くの被災地で高台移転の計画が進んでいるが、海とともにある生活を高台移転後も続けられるのか疑問を感じている。豊かな海の暮らしを継承するために、果たして高台移転が最善の方法であるのか考えたい。

#### 参考文献

- 1) 宮城県女川町, 女川町誌, 宮城県女川町役場, 昭和35年8月10日発行
- 2) 宮城県女川町, 女川町誌続編, 女川町, 平成3年3月31日発行
- 3) センリン住宅地図 2011, 2008, 2005, 2003, 2000, 1998, 1995, 1991, 1985, 1891
- 4) 日本地理学会津波被災マップ
- 5) 国土地理院, 女川町都市計画基本図, 平成19年測量
- 6) 吉川正展, 宮城県女川町における漁村集落群の再形成に関する研究, 大阪大学工学部地球総合工学科建築工学科目キャンパス・地域デザイン研究室 平成24年3月

表2: 納屋の使い方

	行為内容	A	B	C	D	E	計(人)
作業	釣り具づくり	○	○		○		3
	魚を洗う	○		○			2
	魚をさばく			○	○	○	3
	その他	○	○			○	4
	着替え	○	○	○	○	○	5
収納	漁の道具	○	○	○	○		5
	畑仕事の道具	○	○			○	4
	ストッカー	○	○	○	○	○	5

表3: 漁業種と働き方

	養殖	沿岸	遠洋	状況	年齢等
F	○	○	○	30代まで遠洋漁業に従事、船を下りた後は竹浦に戻って養殖をしていた。	80代男
G	○	○		養殖中心だが、季節になるとアワビやウニ漁をする。	30代男
H	○			若い人に手伝ってもらい、ホヤとカキの養殖のみ。	70代女

表4: 子どもの遊びと場所

海岸	釣り、貝とり、散歩、泳ぐ
ちびっこ広場	かんけり、ケイドロ、遊具
ゲートボール場	キックベース、野球、体操
山	ひみつ基地、おにごっこ
道路	そり、スキー、自転車

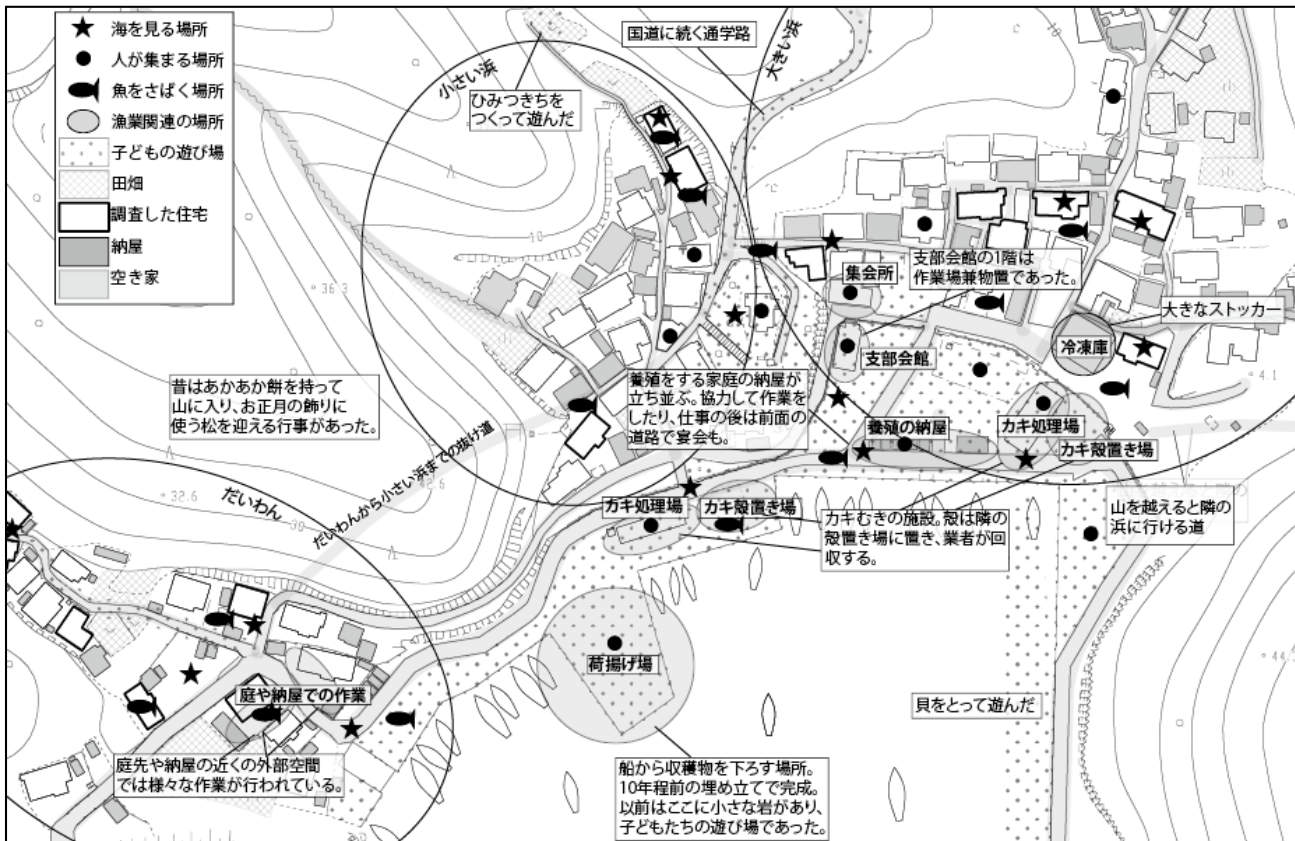


図2: 集落と行為の場所 (国土地理院発行の地図より作成)